※著作権保護期間の終了した文章を使用しています。※ルビは施していません。※無断使用はご遠慮ください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（解答は句読点も字数に数える）

修業式の五日ほど前に、祖母が息をひきとった。持病はなかったから、つまり老衰死である。その死顔も、また死そのものとの接触感も、ともに少年の意識にのぼらなかった。父がおいおい手ばなしで、まるで子供のように泣きながら家の中をうろうろしているのを、少年は何か不思議な観物を見るように眺めた。お別れに、割箸の先へつけたガーゼで祖母の口を拭かされた時にも、土色に窄まって開いている老女のしなびきった唇は、みにくいと感じただけに過ぎない。もう一つ、そんな醜いものを半公開の儀式にまで仕立てる大人たちの愚かさに、へんな軽蔑の情をおぼえただけにすぎない。少年はむしろ①祖母に同情した。彼女の死への同情ではなかったけれど。

そんな少年にとって、もし何か死の実感に似たものがあったとすれば、それは祖母の死ぬ日の朝から（臨終は夕方だった）、近所の大きな黒犬が庭へまぎれこんで来て、前脚を縁側にかけながら、しきりに遠吠えをしたことである。いくら追はれても水をぶっかけられても、犬は出て行かなかった。ますます牙を剥きだして吠えさかった。少年は、いよいよ祖母が息を引きとったあとで、②あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬものが、つまり死なのだと思った。

葬列も葬式も、あらゆる大人たちのする儀礼の例にもれず、長たらしく退屈な、無意味な行事の連続にすぎなかった。少年は南国の春の砂ぼこりの中に、小さな紋附羽織を着せられて、みじめな曝し物にされている自分だけを意識していた。腹だたしく、口惜しかった。

少年は、あの吠えさかる犬が目に見ていたものが死なのだと、漠然と感じてはいたけれど、これには勿論、想像のへだてとでも言うべき一皮かぶった気持があった。少年が祖母の死を、はっきり現実として受けとったのは、いよいよ修業式が済んで、小さな免状と大きな優等証書の二枚を筒巻きにして、ぼんやり家に帰って来たあとである。父は役所だった。家には母だけがいて、その筒巻きを手にすると、ちょっと拡げてみて、「そう」と、にこりともせず、呟くように言った。そして、また巻いて、父の机の上に置いた。

少年は勿論、ほめられようと思って帰って来たわけではない。第一少年自身にしてからが、その日のことをさっぱり嬉しいとも誇らしいとも思ってはいない。勝気で、無口で、そのくせ胸の奥に何か少年には窺い知ることのできない情愛や智恵を、じっと包みこんでいるような母の性格も、少年には分りすぎるぐらい分っている。そういう母を、少年はたしかに心のどこかで愛してはいるのだが、その一方やはりその母に、一種の嫌悪と反発を、たえず感じずにはいられなかった。自分自身の影に、無限に愛情を感じる人もあれば、無限の嫌悪をいだく人もある。その中間の人は極めて珍しい。少年は明らかに後者の型だった。少年は母のなかに、③自分の影を嗅ぎつけていたのである。……そんな母から少年は「そう」という呟きのあとに「よかったね」という言葉が添わることを、最初から予期していたわけではない。しかしその日だけは、何か無性に、それに類する慰めの一言が欲しかった。少年は疲れていたのかも知れない。死や葬式や修業式が、たてつづけに続いたのである。少年は甘えたかった。ほんの少し。ただ、ほんの少し。……

少年は自分の勉強机の前へ行って、ゆっくり袴の紐をときながら、ふと祖母のいない空虚さを、焼けつくように頭の一隅に感じた。祖母ならば、「よかったのう」と言ってくれるばかりか、痩せ細ったカサカサの手で、頭を撫でたり、何かその辺をごそごそいわせて、褒美を出してくれ、撫でられたり、褒美をもらって嬉しそうな顔をつくろうのは、少年にとって迷惑なことだったが、それをしてくれる人は、五日ほど前から、突然いなくなったのだ。あの隠居部屋には、たしかに誰もいないのだ。……この不在の感覚が、痛いほど少年をしめつけた。

そうした少年の心の動きは、祖母への追慕などというものとは、およそ縁のない、裏はらなものに違いなかった。そこには一種の罪障感と自責の念が、黒々とよどんでいた。祖母は、……あんなにも自分が甘えぬき同時にまた避けぬいた祖母は、自分から何の感謝のしるしも受けとらずに、黙って死んで行ったのだ。この取り返しのつかないものが、つまり「死」というものなのだ。

少年は、この空虚感と、自分への怒りとに、どうにも堪えられなくなって、縁側に寝そべったまま、ふと口に出してみた。

「お母さん……お祖母さんは？」

「え？」

座敷の暗いところで、何か片づけ物をしていた母は、怪訝そうに少年を見た。そして、哀れむようにじっと見つめた眼を、またよそへそらした。

少年はその瞬間、しまった、と思った。ちらりと目にうつった母の眼のうるみのなかに、少年は④明らかな誤解の影をとらえたのである。

「ううん、そうじゃないの……」と、少年は打ち消そうとして、言葉につまった。

「何が？」

母は小声で聞き返して、また哀れむように少年を見た。

（神西清『少年』より　表記を現代仮名遣いに変更しています。）

問一　①「祖母に同情した。」とあるが、少年は祖母がどんな状態であることに同情したのか。二十五字以内で書きなさい。

答：（例）　自分の醜い姿を半公開の儀式にされている状態。（22W）

問二　②「あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬものが、つまり死なのだと思った。」とあるが、少年はその後、どんなものが「死」であると考えるようになるか。文章中から十三字で書き抜きなさい。

答：この取り返しのつかないもの

問三　③「自分の影」とあるが、少年は何に対して「自分の影」を感じているか。文章中から六十字以内で探し、初めと終わりの五字ずつを書きなさい。

答：勝気で、無口　～　な母の性格

問四　「明らかな誤解の影」とあるが、少年は母がどのような誤解をしたと考えたのか。次の文の空欄に当てはまる言葉を、二十字以内で書きなさい。

＊少年が［　　］という誤解。

答：祖母が死んだことを受け入れられていない（19W）

問五　この文章の表現上の特徴を述べたものとして最も適切なものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　少年の視点から、大人たちの行動を時系列に沿って細かく描いている。

イ　少年の視点から、母の挙動を精緻に描写し母の心情を描き出している。

ウ　話者の視点から、少年の繊細な心の動きを細かく丁寧に描写している。

エ　話者の視点から、場面の気配を独特の比喩を多用して描き出している。

答：ウ